

電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

第六回

第六章 裏切りは世の常

1

夏の早朝、四時半から福澤先生は三田界限ふくざわを散歩する。体調管理
と思案を兼ねているのだが、まだ陽も昇り切っていない。薄暗がり
の中を慶應義塾けいおうぎじゆくの塾生が、先生の後をぞろぞろとついて歩く。

夏はまだいいのだが、冬は五時半から散歩が始まる。寒い。暗が
りの中でも白い息が立ち上る。

塾生は、眠い目をこすりながら歩くだけだ。中には、大きなあく
びを洩もらす者もいる。散歩の間、先生の講義が聞けるのであれば散
歩の意義があるのだが、先生は何も話さず、ずっと黙っている。

『時事新報』の社説のことでも考えているのだろうと思うのだが、
塾生の会話には耳を傾けているようだ。

別のことを思索しながら、他人の話に耳を傾けられるのは先生の能力の一つである。

いつの間にか散歩に参加する塾生は、ほぼ決まってしまった。私は塾生ではないのだが、先生の娘婿として彼らの世話係のような形で散歩に参加している。

結核もなんとか治まり、大磯おおいその静養先から三田の自宅に帰って来てからは先生の散歩につき合うのが日課の一つになった。

先生が話をしない分、塾生の眠気を覚ますためにも私が話題を提供しなければならぬ。先輩として彼らに議論の題材を投げかける。時事問題も多いのだが、時には処世に関するものもある。

例えば、こんな話題である。

「天は自ら助くる者を助く」

これは西洋の諺ことわざ、

「Heaven(God) helps those who help themselves.」

に由来するようだが、他人に頼らず自立しなさいという意味だ。

先生が常々仰おっしゃる、独立自尊にも通じる意味を持っている言葉である。

私は塾生に、この言葉をどういう風に受け止めればいいのかと問いかける。

「怠なまけ者は成功しないということでしょう」

「他力を頼むより、自力で成功を掴むつかということですよね」

諺の意味など分かり切っていると、退屈そうに答える。

「意味はその通りだが、世の中を見渡した場合、自力のみで成功者となりうるのか。かく言う私も福澤先生の助けがあつて結核を完治させたようなものである。助けを求めるわけではないが、他人から助けられ、愛される人物の方が成功するのではないか」

私は、ここで議題を少し広げて、「憎まれる者と愛される者どどちらが成功するか」と問いかけた。

福澤先生の名前を挙げたので、先生の耳が動いたような気がした。

「そりや愛される方がいいでしょう。自ら助くにしても愛された方が成功するでしょう」

この意見に何人かの塾生が賛成と言った。

「違うと思います」

一人の塾生が異論を唱えた。

面白い。私はその塾生に注目した。頬骨ほおほねがいかつく飛び出している、一見すると愛される顔つきではない。どちらかと言えば強面こわもて

だ。松永安左エ門まつながやすざえもんである。

松永は変わった経歴である。

明治八年（一八七五）生まれだから、七歳年下だが、私より老成

した印象がある。

長崎県壱岐いっきの商家の生まれで、裕福に暮らしていたが、どうしても福澤先生の教えを受けたくて明治二十二年（一八八九）に上京し、塾生となった。私がアメリカから帰国し、ふさと夫婦になった頃だ。

しかし、不幸なことにコレラに罹患りかんしてしまった。

コレラは昔からコロリ（虎列刺）と恐れられ、毎年と言っていいほど流行し、多くの人の命を奪った。

松永が罹患したのは明治二十三年（一八九〇）の流行だろう。この年も四万六千人もの人が罹患し、三万五千人ほどが亡くなった。幸い、松永は助かった。同時期に罹患した友人は亡くなったという。松永に神様が生きよと言ったとしか考えられない。

松永は学業を諦めあきら、帰郷し、静養することになった。不幸は続く。父親が亡くなったのである。そのため父親の事業を継承せざるをえなくなった。

「酒造りから海産物の貿易まで、多くの事業をやっていました」
松永は私に話したことがある。猛烈に忙しかったようだ。

「でも、土地だけを残して、事業はみんな手放したんですよ」
英断であると私は答えた。

松永にしてみれば、このまま事業に埋没まいぼつしていれば慶應義塾に戻

れず、田舎のお大尽だいじんで終わってしまう。それが嫌だったのだろう。田舎では事業の発展も望めないし、自分にはもつと可能性があると考えていたのだ。

「何者かになりたかったんです。私にしかできないことがあるはずですから。親戚や父の事業仲間からは、憎まれ、嫌われ、ののしられましたね。うつけ者うつけものってね」

松永は私に笑いながら言った。

そして明治二十八年（一八九五）に、慶應義塾に復学したのだ。事業を担い、それを手放す経験が松永に老成した印象を与えているのだろう。

「松永君は、愛されない者、憎まれない者の方が成功するとか。なぜ、そう思うんだ」

私は聞いた。

「人に愛されれば、そこから逃げ出せなくなります。そこに留まれば、愛してくれた人の部下のままではなりません。世話になつた人を超えることが出来ないのです。憎まれるかもしれないですが、その庇護ひごの下から飛び出し、世間の冷たい風にあたり、なくそつと覚悟してこそ大成功の道が開けるんじゃないですか。上の人の顔色ばかり窺うかがっていたら、それだけの人にしかならないでし

よう」

自分が他人にどのような思われ、非難されようとも事業を手放し、自分の力で人生を切り開こうとした松永自身のことを話しているのだと私は思った。

「誰か反論はあるか」

私は他の塾生に聞いた。

「でも成功の可能性は、愛される方が高いのではないか。実際、会社に入っても上司に睨にらまれたり、嫌われたりしたら出世は望めないだろう」

その言葉に、何人かが同意した。

「君の言う通りだろう。でも、それでは小成であって大成にはならないと僕は思う。大成するためには憎まれ、嫌われ、それに対抗する力をつけることが必要だ。それこそが天は自ら助くる者を助くではないか」

松永は強く反論した。

面白い男だ。この男も、他に交じることなく「松永安左エ門」そのものになろうとする気概を持っている。

「私は松永君に賛成だね。会社で上司に愛されるのはいいが、それに甘んじていては、その会社で一生、その上司と運命を共にしなくてはならない。たとえ憎まれ、嫌われても、その上司を超える気概を持って、飛び出さねば、大成しないのではないか」

私は、その時、福澤先生の肩が微妙に動いたのを見た。先生は、私の言葉の裏を考えたのかもしれない。

私は、療養中に株式投資を行い、大金を手にした。このことは先生に秘密である。しかし当然ながらふさの口や、私によからぬ感情を抱いている者から話は伝わっているだろう。

ふさには金輪際、株には手を出さないと言っておきながら、相変わらず株をいじっている。とりあえず北海道炭礦鉄道たんこうに職場復帰したものの、以前のように仕事に熱が入らない。

懐に大金があると思えば旅から旅へと楽しみ、遊郭ゆうかくなどでの遊興にふけることも増えてきた。

一方、ふさは実家に戻ってからというもの、義母のきん様と一緒に二人の子どもの世話にかまけ、私のことなどんと関心がない。

まさか私を、福澤家に種を提供してくれた種馬だと思っているわけではないだろうが、あまりの無関心にさすがの私も不機嫌になる。自宅に帰っても面白くないから、金に飽かせて遊んだりする。

表向きは優しい夫であり、婿養子であるが、このままでは心がふさから離れてしまう。

ふさやきん様は、私が福澤家から離れるとは想像もしていないだろう。それだけ、世の中を渡るにあたって福澤の姓は有効だからだ。誰が好き好んでこれを捨てるだろうか。

だが先生だけは違う。私の野心を見抜いておられる。だから私
が、たとえ愛されていても上司の下を飛び出さねば大成しないと言
った時に、微妙に肩が動いたのだ。その動きは、先生の動揺した気
持ちの表れではないだろうか。

それにもう一つ、問題がある。私の心がふさから離れつつあるの
と同時に、ふさの心も私から離れる可能性があるということだ。

ふさは私のことを深く愛している。しかし先生の娘として大切に
育てられてきたため、実家に戻った途端に妻から娘に戻ってしまった
のだろう。それに加えて私への疑念が、彼女の心を曇らせている
のだ。

それは、貞奴さだやつこの存在である。

貞奴は、今は川上音二郎かわかみおとじろうという役者の妻となり、完全に花柳界かりゆうかい
から足を洗っている。

彼女は非常に勝気である。私と似た者同士である。私は彼女をフ
ーム・ファタールと思い、会うたびに彼女との間にびりびりとした
感応の電気が走る感覚を味わう。

大磯で静養している時、彼女は何度か私を見舞ってきた。

貞奴は、音二郎を愛している。彼を男にしたいと言っていた。結
婚したのは、私が福澤家の婿養子になったことへの当てつけではな
いのかと冗談めかして言うと、それはないと言い切った。あなた

は、私抜きでも世に出る人だ。しかし音二郎は違う。私がいなければダメな人なのだ。女にも金にもだらしなく、どうしようもない男だが、才能はある。私のような花柳界に身を置いた女は、自分自身が世に出ることはできない。それならば男を支えて、その男を一人前にすることが、自分が世に出ることなのだと言った。

まるで、音二郎は君の作品だね。そう言って、私は笑った。

そうしたやりとりが、ふさの耳に入ったようなのだ。ふさは、私と貞奴の関係を疑っている。肉体関係などあるはずもないのだが、疑いの小さな染みは、ふさの中でじわじわと大きくなっている。

ある時、ふさはどこからか、貞奴が音二郎のために川上座という常設劇場建設に奔走していると聞きつけた。もとより音二郎に金があるはずもなく、建設資金調達は貞奴の仕事である。ふさは、貞奴が私に資金援助を頼んできたと思ひ込んだ。

「あなた、聞いている？ あのオッペケペーで有名な川上音二郎が歌舞伎座の向こうを張って劇場を作るんですって」

「そうなのか」

私は無関心を装って応える。

「ご存じなかったの？ 川上音二郎って、あの貞奴という人が奥様でしょう。あなた、彼女をご存じなのでしょう？」

「ああ、知っている」

「お親しいの？」

「別に、親しくはない」

「でも大磯の療養先にお見舞いに来られたって聞いたわ」

「そういうこともあったね」

「援助なさるの？」

「何に？」

「劇場建設に……」

「はははは、ありえないよ。私がどうして音二郎の劇場建設に援助する義務があるんだね。おかしいことを言うもんじゃないよ」

「そうなのね。絶対にないのね。彼女もあなたに頼んでいないのね」

「頼むはずがないじゃないか。私は全く関係がない」

私は、身体からだの芯が熱くなるほど興奮していた。それは怒りからではない。ふさの誤解を解かねばならないと思ったからだ。

ふさは性格的に非常に素直に育っている。先生はきん様一筋であり、妻や子供たちを大事にされている。それが夫や父親のあるべき姿であると信じている。それをはみ出す男がいることが信じられないという女性なのだ。だから渋沢栄一しぶさわえいいちや伊藤博文いとうひろぶみなどの艶聞えんぶんを耳にすると、不潔だと言って耳を塞ふさぐほどである。私は、ふさの追及から逃げ出すかのように、「全く関係ない」と強く否定した。

ふさはその言葉を聞き、笑みを浮かべた。それは安堵あんどしたというより、私に釘を刺したことに満足した笑みのように思えた。裏切りは許しません……。その意味を込めた笑みだっただろう。

私は、福澤先生の庇護の下を離れて飛躍できるかもしれないが、ふさが張り巡らせた網を破ることはできないだろうと、わずかに恐ろしさを覚えながら彼女の笑みを見つめていた。

「桃介君と松永の意見に賛成だ」

福澤先生が言った。私に背中を見せたままだ。「人を助ければ、自分も助けてもらえると思うだろう。しかし自分も助けて欲しいから人を助けるというのは独立自尊の精神ではない。人を助けるのは良いことだが、自分が助けを求めるのを前提にするのは断じて間違いである。まず諸君は、自分の食を得る方法を講じなければならぬ。自分の食を満たして後に人を助けるような仕事をしなさい」

私は、松永と視線を合わせた。先生の同意に、我が意を得たりということだ。

福澤先生ほどの人はいない。人の助けを借りる、期待するということはまずない。しかし、ご自身はどれだけの人を助けて来られたか。それも見返りなしに。

私も先生に助けられた一人である。だからこそ、先生の助けから

早く離れ、自分の足で立たねばならないと自覚している。それが先生の恩に報いることなのだ。

だからあえて言う。憎まれっ子世に憚はばかるとも言うが、「天は人の助けざる者を助く」。すなわち自ら努力する者も天は助けてくれるが、人からの助力を期待せず、憎まれ、嫌われようとも我が道を貫く人も天は助けてくれるだろう。

「松永君、君は面白いね」

私は、松永に親しく声をかけた。

「ありがとうございます」

老成したように見えた松永の顔に、青年の客気が浮かんだ。

2

松永とは気が合った。自分で商売をしていたこともあるので、他の塾生のように世間知らずではないからだ。

ある時、福澤先生が「日本は山も水も豊かである。水力発電に力を入れるべきだ」と火力発電重視を批判し、水力発電に注力すべしと『時事新報』に書いた。

その意を受けて私は、上州前橋とねがわの利根川水域で水力発電を出願することにした。地元の素封家そほうか、下村善右衛門しもむらぜんう えもんを發起人に立てたので

あるが、色々な利害関係者を説得しなければならなくなった。

そこで松永に、「病み上がりの身体では酒も飲めない。一緒に行き、地元対策に協力してくれないか」と頼んだ。

松永は二つ返事で「私も酒は飲めない方ですが、桃介さんよりはましでしょう」と言い、一緒に行ってくれることになった。

松永は、熱心に地元の有力者の説得にあたった。宴会にも積極的に参加してくれたが、水力発電に関しては出願だけに終わった。時期尚早、気運が熟していなかった。まり地元が乗り気でないので、私も熱気が冷めてしまった。

松永は、慶應義塾をあと一年残すのみとなったのだが、学問に対する意欲をなくし、中退しようと思っているという。

福澤先生に相談すると、先生は、辞めた方がいい、辞めるべきだと中退を強く勧めた。

学校を卒業することに意味はない、独立すべきだと言う。松永が一度、塾に入ったものの退学し、社会人となった経験があることも、強く勧めた理由の一つだろうと思う。

最も大きな理由は、先生が松永の資質を見抜いていたからではないだろうか。この男は、学問で身を立てる人間ではない、事業を興すべき人間であると。

そこで先生は、松永にうどん屋になれ、もしくはとりあえず風呂

屋の三助さんすけになって後に風呂屋を経営するのはどうか。君は、絶対に事業家になりなさい。間違っても役人や銀行家になってはいけないと言ったそうだ。

先生が、安定した役人や銀行家よりも、どんな結果になろうとも事業家になるべきだと言うのは持論であるが、それにしてもうどん屋とか風呂屋の三助になれというのを聞いて私は大笑いした。

松永が、それはあんまりではありませんか、と難しい顔をする
と、先生は三井呉服店みつゐに慶應義塾の先輩がいるので、呉服屋になれと頻しきりに勧めた。

松永は、呉服屋に自分が向いているとは思わなかった。しかし先生があまりにも勧めるので仕方なく三井呉服店に行き、塾の先輩、朝吹英二あさふきえいじに会った。

ところが朝吹は、松永の不器用振りをみて、先生の推挙があったものの入社を断ったのである。

私も松永のいかつい雰囲気からして、呉服屋に相応ふさわしいとは思わない。先生も酷こくな会社を紹介したものだ。

悄然しんぜんとして私のところに相談に来たので、私は日本銀行に入ること勧めた。

日本銀行は岩崎弥之助いわさきやのすけが退任し、慶應義塾の先輩である山本達雄やまもとたつおが総裁になっていた。東大出身者が幅を利かしていた日本銀行を慶

応義塾出身者が支配するのも面白いだろうと思い、松永に入行を勧めたのだ。

松永は困惑気味に「先生は銀行家になるなど仰いましたが……。叱られませんか」と言った。

私は、「叱られても構わないじゃないか。総裁秘書の方がうどん屋よりはいいぞ」と応えた。

私の勧めに従い、松永は日本銀行に入ったのだが、総裁秘書ではなく営業部に回された。

どうなるものと心配していたが、やはり松永は銀行業には向かなかった。机に向かってじっとしているのは松永らしくない。それに総裁秘書として雇われたと自認していたから、役員食堂で昼食をとるなど、一般行員には相応しくない行動をとったため、変わり者と思われ、敬遠されてしまった。

「話が違います。総裁秘書じゃないですよ」

松永が、私に文句を言った。

「それじゃあ、辞めろ」

私は造作なく言った。

「えっ。それはしないでしょっ！」

「嫌なところに無理に勤務することはないだろう」

「辞めてどうするんですか？」

松永の顔に不安の色が浮かぶ。

「私と一緒に会社をやろう。独立自尊だ」

私は喜び勇んで言った。

松永は諦め顔で、「桃介さんがおっしゃるならやってもいいですけど。なんの会社ですか」と聞いた。

「貿易会社だ」

私は、明治三十二年（一九一九）に丸三商會を設立した。

福澤先生に相談すると、やりなさいと諸手を挙げて賛成し、二万五千元もの大金を出資してくださいました。大変な額である。銀座の地価が坪三百円から四百円であるから、その七十倍から八十倍だ。先生は私のことを本気で気にかけてくださっているのだ。

先生から見れば、私はふらふらと尻の落ち着かない不肖の娘婿だ。会社勤めもしない。先生の甥である三井銀行専務の中上川彦次郎なかみがわひこじから紹介された王子製紙取締役という願ってもない立場をもらって、感謝もせず、仕事に身が入らない。さらに、ふさに内緒で株式投資を続けている。

桃介は、いったい何をしているのだ。福澤先生の娘婿に相応しくない。批判の声が、先生の耳にも入っているに違いない。

私は、単なる怠け者というわけではない。まだ、自分が本当になにをやりたいのかわかっていないだけなのだ。自分探しと云えば、

都合のいい言い訳になるが、自分の力で何者かになりたい。そう願っている。福澤諭吉ゆきちという巨木の幹に寄りかかり、青々と葉を繁らせた枝の下で暮らしていいのか。先生門下の人は、私を運のいい男だと思っていることだろう。福澤先生の庇護下で、真面目に、実直に暮らしていれば、それなりの者になることが出来、未来の安寧あんねいが約束されているからだ。

しかし、私のもやもやとした思いを誰も分らないだろう。先生の娘婿になったことだけで、私の人生が決まっていいるのだろうか。そんな人生が面白いだろうか。そんな人生が熱氣ねつきを孕はらんでいるだろうか。富貴ふうき顯官けんかんの下に生まれた者なら、自分の人生を甘んじて、あるいは疑問なく受け入れるかもしれない。私は、川越かわごえの水のみ百姓の息子である。そんな男にとって、自分の力ではなく、福澤先生の力によって世に出るといふ、この居心地の悪さは誰にも分かってもらえない。

こんなことを考えるのは、株式投資の成功が私を少々強気、否、傲慢ごうまんにしていたからかもしれない。

先生はその前年（明治三十一年）九月、突然脳溢血のういつけつで倒れられた。幸い、大事に至らず回復され、塾でも盛大にお祝いし、天皇陛下からのお見舞いという栄誉たまわを賜ったのであるが、それ以来、先生の私を見る目が厳しくなった。もし自分に何かがあったら、ふさ

や孫たちはどうなるのかと心配でたまらなくなったのだろう。

「先生がそんな大金を出資してくださったのですか？ それは心強い」

松永は喜んだ。

福澤先生の後ろ盾があることで安心したのだろう。

「私が独立して事業をやりたいと言ったので安心してくださったのだらう。その代わり、塾の幹事だった益田英次君を監査役の名目で送り込んでこられたけどね」

「桃介さんのお目付役ですね。あの方は堅くて有名ですから」

「私とは正反対というわけだらう。まあ、先生としても大金を出資した以上、私には成功してもらわねばならないからね」

私は苦笑した。

「ところで何を貿易するんですか」

松永は聞いた。

「さしあたっては枕木まくらぎを輸出する。ロシアに売るんだ。ロシアは今、シベリア鉄道を敷設ふせつするために枕木が大量に必要なのだ。アメリカン・トレード・カンパニーの日本総代理店になった。今、ロシアは、猛烈な勢いで南下政策を遂行している。日本が日清戦争で勝利し、朝鮮や中国に足掛かりをつけたのを警戒しているんだ。松永君は三国干渉を覚えているだらう？」

「勿論、覚えています。悔しさとともにね」

明治二十七年（一八九四）八月一日、日本は清国に宣戦布告。日清戦争が始まった。

日本は勝利し、翌明治二十八年（一八九五）四月十七日、日清講和条約（下関条約）が調印された。そこで確認されたのは、朝鮮の独立承認、遼東半島、台湾、澎湖列島の割譲、賠償金二億両の支払い、欧米並みの通商条約締結などである。

日本の損害は死者、負傷者など一万七千人、馬一万千八百頭、戦費二億四十七万円だった。

日本国内では大国清国に勝利したことで、各地で祝勝会が催されていた。その最中、ロシアが中心となりドイツ、フランスが遼東半島を清国に返還するように日本政府に干渉してきた。

ロシアは、満州など中国東北部に進出するために、遼東半島にある不凍港である旅順港が必要だった。その港が日本支配下に入ることは絶対に阻止しなければならない。そこで中国での権益拡大を狙うドイツ、フランスに日本への政治的干渉をもちかけたのだ。

日本政府は窮地に立たされた。三国干渉を容認すれば、戦勝気分を沸く国内の反発は必至だ。かといってこれを拒否すれば清国は条約批准を拒否し、再び戦争ということにもなりかねない。日本政府は、イギリスに支援を求めたが、イギリスは仲介に入ることを謝

絶してきた。

日本は、やむなく遼東半島を清国に返還することを決定したのである。

国内では、この決定に反ロシア感情が渦巻くことになった。臥薪嘗胆しやうたんという言葉が流行語となったり、日口戦えば、という議論が雑誌などに登場したりと、後の日露戦争の遠因となった。

ロシアはその後、清国への進出を強化する。シベリア鉄道を延長し、満州内陸部を通過して大連や旅順まで達する鉄道の敷設を進めたのである。

「日本はロシアの政治的圧力に負けて譲歩したんだが、ロシアはその機に乗じて清国を食い物にする算段なんだ。その肝きもがシベリア鉄道というわけだ。それが我々の商売になるんだよ。枕木用の木材は、北海道炭礦鉄道から調達するから大丈夫だ」

私は自信たっぷりに言った。この商売は成功間違いなしである。なにせアメリカン・トレード・カンパニーとの間に二十万円もの輸出商談が内定しているのだ。

二十万円といえば、銀座の土地で言えば、五百坪も購入できる額である。

「資金はどうするんですか？」

松永は心配そうな顔をする。

「君は意外に慎重だね。まあ、私も慎重で、度胸のない方だがね。三井銀行が私を支援してくれることになっている。三井銀行には、塾の先輩、同輩、後輩が多く在籍している。彼らが私の事業を支援してくれるというわけだ。近々、アメリカン・トレード・カンパニーから前渡金が送られてくるから、それで仕入れをする」

「それなら大丈夫ですね」

ようやく松永の表情が緩んだ。

私は、この事業を成功させ、実業界に飛躍するつもりだ。福澤先生には感謝しているものの、いつまでも婿養子という看板を下げ歩いているわけにはいかない。

しかしこの目論見もくろみはたちまち失敗し、私は奈落の底に落とされるのだ。

3

「いったいどういうことだ」

私は、身体の芯から震えがきた。

監査を担当している益田が、「アメリカン・トレード・カンパニーが前渡金支払いの取り消しを通告してきました。そればかりか三井銀行が荷為替取引にがわせを断ってきました」と言ってきたのだ。

前渡金がなければ仕入れはできない。荷為替が組めなければ、それを担保にした銀行取引ができない。それらができないということは、丸三商会の事業が破綻する^{はたん}ということだ。

何が起きているのか、私は全く分からなかった。ついさきほどまで晴れていた空が、一転にわかにかき曇り、大嵐になったようなものだ。

小樽^{おたる}と神戸に支店を設置し、神戸支店長に松永を任命し、全てはこれからだという矢先だ。

私は、アメリカン・トレード・カンパニーの担当者に電話した。「なぜ、前渡金が出ないんだ。これでは仕入れができないではないか」

私は激しい口調で抗議した。

「全て信用調査の結果です」

担当者は、感情を交えずに答えると、電話を一方的に切った。

私は受話器を握りしめたまま、呆然^{ぼうぜん}とした。

信用調査？ なんのことだ。

前渡金があれば二十万円の大仕事は不可能だ。自己資金は全く足りない。株式投資で稼ぐことなど現実的ではない。

私は三井銀行に向かった。彼らが支援してくれるはずである。それが荷為替取引を断ったということは信じられない。

私は、自分の周りで何が起きているのか想像もできなかった。私を支えていた土台が、がらがらと崩れ、私は立っていることさえできないようだった。

三井銀行の貸付課長である村上定むらかみさだむに面会を求めた。

彼は塾の同期である。私が事業を始める際、全面的に支援すると約束してくれた。

「村上！」

私は、窓口で声を張り上げた。冷静さを完全に失っていた。納得いく説明を聞くまでは、梃てこでも動かない覚悟だった。

「どうしたんだ。血相を変えて君らしくない」

村上は、唇くちびるにうつつすらと笑みを浮かべている。

「そんなことはどうでもいい。いったいどういうことだね。荷為替の取引を断るなんて！ 約束が違うじゃないか」

「約束？ そんなものをした覚えはない。支援を検討すると申し上げただけだ」

「な、なんだと！ 今更、何を言うんだ」

唾つばを飛ばしながら、村上に食ってかかる。不愉快そうに村上は顔を拭ぬぐった。

「全てはこれだ」

村上は、私の鼻先に一枚の書類を突きつけた。

「これは？」

「東京興信所の調査報告書だよ。アメリカン・トレード・カンパニーは取引額が大きいので調査を依頼した。当然だ。東京興信所は、君のことを、株式相場好きで事業家として安定性がない。信用絶無、資産僅少きんじょうと回答した。これを見たら当然、前渡金の支払いはストップするよ。そうなれば事業契約はご破算になったも同然だから、我が行も荷為替取引を止めたのだ」

村上是淡々と説明する。

村上とは、特別仲がいいわけではないが、悪いわけでもない。だが、お互いよく知った仲である。その男が、薄笑いを浮かべた表情で、私に死刑を宣告している。私の身体から魂たましいが飛び出し、天井から呆然と佇たたくむ私を眺めていた。

村上が、無情にも告げる。

「残念だが、そういうことだ」

「無茶苦茶だ。なんとかしてくれよ。確かに株を少しやることはある。だがそれで財産をなくしたり、誰かに迷惑をかけたわけじゃない。むしろ儲けているんだ。資産僅少？ そりゃ三井や三菱に比べりゃ僅少だよ。だから前渡金や三井銀行に頼るんだ。東京興信所の森下岩楠もりしたいわくすさんは塾の先輩だ。俺のことをよく知っているはずだ。信用絶無、資産僅少なんて報告するはずがない。これは何かの間違い

だ」

私は、村を拜むように両手を合わせた。

「君は、自分で思っている以上に評判が悪いんだ」

村が冷たく言い放った。

「どういう意味だ」

私は目を吊り上げ、満腔まんこうの怒りを込めて村上に迫った。これほどまでに腹が立ち、悔しい思いをしたことはない。丸三商會が倒産するかどうかの瀬戸際だ。それが私の評判が悪いからというのが理由では納得できない。

「森下所長が、こんな報告書を自分一人の判断で書くと思うのか。彼は大先生のご意見も伺ったらしい。大先生は、君にも困ったものだとおっしゃって、少し反省を求めねばならないとお考えを呟つぶやかれたようだ」

「嘘だ。そんなことをおっしゃるはずがない。丸三商會の設立にあたっては大賛成で、出資もしていただいたんだ」

私が福澤先生の出資のことを口走ると、村は驚いたように目を睜みはり、「いやあ、出資の件は知らなかったが、大先生が君に反省を求めておられるのは本当だ。さらに言えば、森下所長は、うちの中上川専務にも相談したんだ。専務も、君への支援は止めた方がいいとお考えだ」と言った。

村上の話聞いて、私は言葉を失うほどの衝撃を受けた。

中上川は福澤先生が最も信頼する人物の一人であり、慶應義塾げいおうぎじくの総帥そうすいともいふべき立場である。

「ということは、塾の総意として私を信用絶無としたんだな」

私の身体は、幽鬼ゆうきのように力なくふらふらと揺れた。

「そういうことだ。今回は一切、我が行として協力できない」

村上は最後通牒さいごつうていを口にした。

私は、村上の下を離れた。まだ足搔あがかねばならない。最後の頼みの綱として中上川に会おうと思った。

中上川は、福澤先生の甥であり、私の親戚である。それなのに私を潰そうとするのか。殺そうとするのか。信用絶無と言いつち、私が実業界で飛躍しようとするのを阻止しようというのか。いったい何ゆえの仕打ちだ。ぜひとも問いただしたい。

専務室に入った。中上川はいないが、秘書の波多野承五郎はたのしょうごろうがいた。波多野も福澤先生の弟子である。

「波多野君、中上川さんはどこに行かれた」

「知らないよ」

波多野は、私の怒りに溢あふれた顔に恐れをなしたのか、逃げ腰である。

「知らないってことはないだろう。君は秘書じゃないか」

「知らないものは知らないんだ」

「君も絡からんでいるのか。私を潰からすことに」

「なんのことだ」

波多野の視線が泳いでいる。知っているのだが、知らない振りをしてるのだ。

「東京興信所の調査報告書に、私のことを信用絶無、資産僅少と書いたことだ。お陰で事業が立ち行かなくなりそうなんだ」

私は波多野に迫った。

波多野はじりじりと後退あとずさりし、壁に背中をつけてしまった。もう逃げられない。

「私の管轄外だ。何も知らない。勘弁してくれ」
情けないほどの泣き顔だ。

「わかった。君を信じよう。だから中上川さんの居所を教えてください。聞きたいことがある」

「教えられない」

波多野は、私を見ようとしめない。

「ぜひ教えてくれ。私は、中上川さんに裏切られた。なぜそんな手ひどい、残酷なことをしたのか聞きたい。聞かねばならない」

「中上川さんだけの考えではない。勘弁してくれ」

波多野の声が弱々しくなる。

しばらく中上川の居所を教えろ、教えないとの問答が続いたが、ついに波多野が諦めた。中上川は、山本総裁に会うために日本銀行に行っていると洩らした。その顔には、自分から聞き出したことは秘密にしてほしいという思いが滲み出ていた。

私は、すぐに通りに飛び出し、人力車を捕まえ、日本銀行に向かった。

運のいいことに、日本銀行から出てくる中上川に遭遇した。山本総裁との面会が終わったのだ。

私は、人力車を飛び降りると、中上川の傍に駆け寄り「中上川さん、待ってください」と声をかけた。

中上川が振り向き、私を視界に捉えた。表情には不愉快さが溢れていた。狷介な性格で、近寄りがたい雰囲気を出す中上川が表情を歪めると、普通ならたじろいしてしまう。しかし私は必死だった。なぜこんな目に遭うのか。それを聞かねば、死んでも死に切れぬというほど思いつめていた。

「東京興信所の調査報告書の件でお尋ねしたい。なぜですか？なぜ私が信用絶無なのですか？この報告書のため、丸三商会は立ち行かなくなります」

私は、中上川の襟首を掴まんにばかりに迫った。

「桃介君、君は失礼ではないか。私の出先まで追いかけてくると

は、無作法にもほどがある。わきまえたまえ。君のお尋ねの件だが、私は何も知らん。私がいちいち、丸三商会のような小さな会社のことに関係していると思っているのかね。担当がいるだろう？ その者に聞きなさい。私は関係ない」

中上川は眉間に深く皺を寄せ、もう近寄るなど言わんばかりの表情で私を睨みつけると、踵を返し、人力車に乗り込んだ。

中上川は、私を王子製紙取締役に推挙してくれたのだが、私はまともに出勤もせず、仕事もしなかった。そればかりか丸三商会を作って、別の事業をしようというのだから、腹に据えかねたのだから。親戚の誼など全く感じられない。

私は、その場に崩れ落ちそうになるのをなんとか耐えた。

再び三井銀行に戻り、担当の村上に何度も頭を下げた。普段、頭を下げるなどという屈辱的な行為はしたことがないが、今回ばかりは別だ。このままでは丸三商会だけではない。私の社会的信用も破綻してしまう。

しかし村上は、三井銀行の決定は翻らない、諦めて出直せと、こちらにもべもない。同窓同期の愛情のかけらもない。

「友達の誼として一っだけ忠告しよう。君も福澤先生の一門なら、これからは品行方正にして謙虚になることだ。何事につけ、出る杭は打たれるというじゃないか」

何を！ と私は、怒りに任せて村上に詰め寄った。村上は、諦め顔に寂しそうな表情を一瞬だけ浮かべたが、そのまま執務室に消えてしまった。

私は、その後、福澤先生の邸宅に呼び出された。

いつもは座敷で待っている先生が、体調が思わしくないのに玄関で私を待っていた。

悄然として先生の前に立つと、「馬鹿者！ 何をやっているのだ！」雷のような怒鳴り声が、私の頭の上に落ちた。普段は冷静に諄々と諭される先生とは別の顔の先生がそこには立っていた。

私は、ただ頭を垂れていた。どこにこの恨み辛みをぶつけていいのかわからなかった。理不尽ではないか。先生には、今回の失態が中上川や益田の口から届いているのだろう。彼らは、私の弁明など端から聞く気はない。桃介も今度ばかりは反省し、懲りたでしょうから、これからは先生を煩わせることはございません。ご安心くださいとでも、したり顔で報告したのだろう。

私が、いつ、どのように福澤一門に恥をかかせたのだ。いささか株式投資で儲けただけではないか。私こそ、独立自尊の先生の考えを体現し、自分で事業を興し、世に出ようとしている。あいつらは先生の威光を頼りに、世を渡っているだけではないか。あいつらこそ先生の面汚しだ。私が、多少、彼らの言いなりにならないからと

言って、よってたかって袋叩きにしやがって……。

先生の怒声を浴びながら私は、反省より反抗心と、そして絶望に身体を震わせていた。

自宅に帰ったが、誰もいない。寒々とした空気が流れている。こんな時に何も言わず、ただ抱きしめてくれるだけの妻がいてもいいではないか。

いったい私は、何をしているのだ。なんのためにあくせくとしているのか。何もかもが嫌になった。ふさも、親戚連中も、誰も彼も福澤、福澤だ。私は福澤の面汚し、不肖の娘婿というわけだ。あんな男を娘婿にしたので、先生が体調を崩したのだと言うのだろう。

馬鹿にしやがって……。私は誰もいない部屋の中で、大声でひと声、わーっと喚わめいた。そして自宅を飛び出した。

その夜は、新橋の宿に泊まった。死ぬ気になっていたが、その前に神戸にいる松永に会い、今回の事態を説明し、丸三商会を整理しなくてはいけない。桃介は、何もかもいい加減で死んだと言われているは沽券こけんに関わる。

朝一番の列車に飛び乗り、神戸に向かったが、むしゃくしゃとした気持ち収まらない。このまま神戸に乗り込んでも、松永に当たり散らすだけだ。

私は、名古屋で下車し、馴染なじみの料亭に入り、芸者を呼んだ。

ここで派手に遊んで、憂さを晴らそうと考えたのだ。死ぬ前に、思いきり世の中を笑い飛ばしてやろうと思ったのだ。福澤の名前の下で、付度そんたくと気遣いばかりして窮屈きゆうくつに暮らしている連中の鼻を明かしてやるのだ。

座敷に上がると、すぐに芸者がすり寄ってきた。付き合いの深い芸者だ。

「桃さん、お久しぶり」

媚こびを売ってくる。

私は、彼女の酌で酒を飲みながら、「死のうか」と言った。

「ああ、嬉しい。桃さんが死ぬほど愛してくださいさるの」としなだれかかって来る。

「違う、違う。本当に死ぬんだ。列車で心中はどうだ。すぐにあの世に行けるぞ」

私は、ぐいっと杯を空けた。

「本気？」

怪訝けげんそうな顔をする。

「ああ、本気だ。何もかも嫌になった」

私は、また杯を空けた。

彼女は黙って私を見つめ、「嫌、心中なんて」と眉根を寄せた。

酒の席の座興だと思っていたのが、本気だと知って、彼女は真面目

になった。途端に座が白けた。

「帰る」

私は席を立った。

料亭を出て、酔って火照^{ほて}った身体に夜風を感じながらふらふらと土手を上った。そこには鉄道の線路が敷設してある。私は月光に照らされ、銀色に光るレールを見下ろした。死神が振り下ろす大鎌のようにも見え、私はその上に腰を下ろした。列車が来れば、私をひき殺してくれるだろう。身体は痛みを感じる間もなくズタズタにされ、私がこの世に存在した痕跡^{こんせき}は、ただの肉片に変わってしまうだろう。

レールの上に座っていると、尻の辺りが冷たく、痛くなってくる。私は目を閉じ、何が悪かったのかと反省しようとした。しかし彼らが私にした仕打ちに、ますます腹が立つばかりだ。

それに加えて、どういうわけか列車がこない。それにも腹が立った。すでに最終列車が通過した後だったのだ。

私は、立ち上がった。死ぬことからさえ見放されたのだ。腹立ち
は募るばかりだ。

ふいに、私にある考えが啓示のように降りてきた。

この際、福澤の名を返上して、元の岩崎に戻ろう。それがいい。

福澤の恥さらし、名折れというなら、そうすることが彼らの望みだ

ろう。ふさとも別れるのだ。その方が先生も安堵するだろう。私は自由になるのだ。福澤諭吉の下から自由になるのだ。それが本来の私だ。

急に死ぬのが、ばかばかしくなり、私は鉄道線路から離れ、宿を取った。

翌朝、列車に飛び乗り、神戸に向かった。福澤の名を捨て、松永と神戸で再起を図る。それから彼らに桃介の力を思い知らせてやるのだ。私の身体に力が蘇ってきた。

悔しさは、力である。

ところが、大津を過ぎた頃、急に気分が悪くなり、咳せき込んだ。同時に生臭いものが口中に広がった。慌てて紙で受けると、真っ赤な血だった。

ああ、なんとということだ。

私は自分の悲運を呪った。結核の再発である。

今度こそ、本気で死のうと思った。福澤一門だけではなく、運も神も私を見放したのだ。私は、デッキに向かった。しかしそこに車掌がやってきた。私のただならぬ様子に驚き、京都で下車し、入院することを勧めてくれた。私を拒絶した連中より、余程親切である。私は、京都の同志社病院に入院した。

私からの電報を受け取り、取るものもとりにあえず駆け付けた松永

に私は、今回の福澤一門のやり口を伝えた。

興奮し、激高し、「ふさと別れ、福澤家と縁を切る。元の岩崎桃介に戻る。君は、義兄の捨次郎すてじろうさんに会って手続きしてきてくれたまえ」と、私は松永に伝えた。

松永は、目の玉がひっくり返るほど驚いた顔をした。私をなだめようとしたが、私はそれを止め、「さつさと上京し、捨次郎にい義兄さんに会って、私の申し出を取り次いでくるんだ。福澤閥と福澤家は今や不倶戴天ふぐたいてんの仇かたきとなったんだ」と怒鳴った。

どうにもならないと諦め顔の松永は、「承知しました」と病室を出ていった。

松永は上京し、益田から丸三商会の危機的状況を聞き、私の怒りの淵源えんげんを知った。そして捨次郎に会ったが、上手く丸め込まれてしまったようだ。

幸いにも私は結核の本格的再発まぬかを免れ、三田みたの自宅に戻った。しかし、やはり一人である。ふさも子どもたちもない。福澤先生の邸宅にいるのだろうか。

私は、松永を呼んだ。京都の同志社病院にいるはずの私が、自宅にいることに松永は一層、驚いた。

「私は、事業から足を洗い、東京帝大で天文学をやる。星を眺めて暮らすんだ。こんな裏切りばかりの汚れた巷ちまたであくせくするのは

人生の無駄だ。元の岩崎に戻って、出直した。頭もまるめる。いっそ、坊主にでもなろうか」

私はくるりと頭を撫なでた。

松永は、私のことを狂人になったと思ったようだ。

暗く沈んだ顔になり、「今は、静かに養生をしましょう。その方がいいと思います」と言った。

私もその通りと思い、松永が探してくれた大森の家に移った。正面には海が見え、身体をいたわるには最適な環境である。私が離婚を申し出たことに反省をしたのか、ふさは子どもたちを連れて、大森にやってきた。

私は、読書と散歩をし、子どもたちと遊ぶ。ふさは南画なんがを楽しんでいる。家事は女中に任せていたが、久々の親子、夫婦水入らずの暮らしである。しかし、私の中に一旦燃え上がった福澤家、福澤閨への怒りは燻くすぶり続けていた。

私は、考えた。復讐ふくしゅうではない。人を呪わば穴二つと言われ、自らを滅ぼすことになる。しかし、怒りと悔しさは別である。

私が間違っていたのは、世の中では裏切りが常であるということ忘れていたことだ。誰でも人生の中で、友人や親しくしている人に裏切られることがあるものだ。それに腹を立て、私のように死ぬとして実際に死んでしまう人もいる。

なぜ腹が立つのか。それは友人とはいえ、他人を当てにしていたからだ。

福澤先生の娘婿の私は、先生の門下生や親戚を当てにしていた。私こそ福澤諭吉の名前を大いに利用していた。自分の力ではない。先生の力で、世の中を渡っていた。

先生の庇護から逃れようと株式投資を手掛け、それがたまたま成功したから、私は生意気になり、自分でなんでもできると思い上がってしまったのも間違いだった。

それならば先生を当てにせず、本当に自分の力だけで世渡りしたらよかったのだ。

ところが自分の都合だけを優先して、福澤閣を利用し、三井銀行という他人の金を当てにして事業をしようとした。

福澤閣、慶應義塾閣に対する怒りは、これからも燻り、容易に消えることはないだろうが、恨んでも仕方がない。彼らを当てにした私が愚か者おろだった。

彼らの力を借りず、自分の力で独立自尊の道を切り開かねばならない。福澤の名前は捨てないが、福澤閣の反逆児として生きることになると決心した。

彼らから見れば、私は才子かもしれぬが軽薄だろう。また何事も長続きせず、飽きっぽく、忍耐力もなく、思い付きで行動し、失

敗を繰り返す、心配の種が尽きない人間だろう。先生にも心配をかけているだろう。

私には、彼らのように先生の教えを守り、指導を受け、実直に世渡りはできない。するつもりもない。

しかし、それでもいいではないか。私は、私なりに生きる。他力を当てにしたのが、今回の大いなる間違いなのだ。

誰が何と言おうと、何と言われようと、お構いなしだ。他人から嫌われようと構わない。忬度、氣遣いは無用の長物だ。私の道は、私の力で切り開く。そうすれば裏切られることもない。

これが軽薄才子である桃介流生き方である。没落しようと、自業自得。これこそが福澤先生の言う独立自尊であるだろう。

私にある意味で、生き方を悟らせてくれたのが、今回の丸三商会の失敗である。人生とは、なんと無駄のないものか。

明治三十四年（一九〇二）二月三日、福澤先生が亡くなった。享年六十八。脳溢血の再発だった。

同年、十月七日、中上川彦次郎も亡くなった。享年四十八。

私は、悲しみと同時に解放感を覚えた。不謹慎ではあるが、おもし重石が消えたからだろう。そして思いがけなく、軽薄才子の私が福澤家を支えねばならないという自覚が芽生えたのである。